

ありのまままで

—自分らしく生きる—

2010年、大手航空会社（CA）だった。娘2人を社の一等航空整備士だった東森宏さん（44）と都城市田町、ひがしのもりファーム代表は悩んでいた。2度目の宮崎勤務も8年目。再び羽田勤務に戻るであろう時期が近づいていた。子どもどころから飛行機に憧れ、この道に進んで20年。幸せとやりがいを感じていたが、知らないうちに心が疲れていた。

整備士は旅客機1機を原則1人で点検する。多くの人命を預かる緊張感、次のフライトに遅れを出してはならない重圧。張り詰めた毎日から解放されたかった。「もう少し、ゆっくり生きたい。空から大地に降りようか」。同市高木町で酪農を営む実家を継ごうと考えていた。

妻薫さん（42）は猛反対した。福岡県出身の薫さんも飛行機と空が好きで、結婚するまでは客室乗務員

（CA）だった。娘2人を抱え、全く知らない農業で生活していくことに実感が持てず反対したが、夫の説得に根負けした。宏さんは

ひがしのもりファーム 東森 宏（44）、 薫（42）さん夫婦

—都城市—

退職し、11年春、実家で就農した。

就農に当たり宏さんは「作る人」、薫さんは「売

る人」と役割分担した。酪農は小規模なため、勉強を重ねて野菜作りに挑戦。地元先輩農家に支えられ、

▷ 3 ◁

夢舞台 空から大地へ

食へるまで熟成させたサツマイモ「紅はるか」を手にする東森さん夫婦



開いてくれたりして応援してくれた。薫さんもインターネット交流サイト「フェイスブック」で地道にPRを重ね、道の駅に出す栗カボチャ「恋するマロン」は売り切れるまでに。もともと「1本の苗に1個しか実を付けさせない」「収穫後、最高に甘くなる食べごろまで熟成させる」など、こだわりが詰まっていただけに一度買った人はリピーターになってくれた。サツマイモ「紅はるか」の売れ行きも好調だ。

経営が軌道に乗るのはまだ先だが、「航空会社に入り、最初の夢はかなえた。これからも、かなえられる夢を持ち続けて生きたい。それが可能なのが農業」と宏さん。「自分たちが作った牛乳と野菜を加工し、付加価値を生みたい」と夢の一端を口にする。

夫婦の野菜には「ひろっさんの野菜」というブランド名とイラスト入りのラベルが貼られている。友人が考えてくれたデザインで、飛行機が飛ぶ空の下に牛と野菜の芽が描かれてい

がむしやらに働いたが、取引先の買い取り価格は低く、道の駅「都城」に出してもさっぱり売れなかった。手間をかけ、味には自信があった。「なぜだ」。収入も激減し、宏さんは「考えが甘かった」と次第にマイナス思考へと陥っていった。

一方、「人と接すること、人をもてなすことが好きで、CAは天職だった」

友人、知人が口コミで宣伝してくれたり、試食会を